八犬伝第三部、「親兵衛の京師物語」

――〈親兵衛第三物語、前半〉成長の確認――

井上啓治

序
Ⅰ、後悔する君子親兵衛、通過儀礼を経て真の中央京師へ
Ⅱ、伏姫神女の地方神性と、親兵衛の謙譲
Ⅲ、『論語』の「過ち論」と、馬琴の「足利義政批判」
Ⅳ、管領細川政元邸抑留と、「知仁勇、三徳」の親兵衛の謙譲
Ⅴ、僅かに描かれる〈親兵衛第一の活躍〉
Ⅵ、まとめ、特徴と注目点

序

ここ数十年、八犬伝の名が知られるようになっても、仁の犬士親兵衛に関しては、およそ魅力的人物・魅力的英雄として語られることは、ほとんどなかったと言えるだろう。そもそも、名のみ高く、読まれざる名著、研究されざる大著であった八犬伝の存在自体も注目されるには、１９８０年の高田衛氏『八犬伝の世界』をまつしかなかった（注１）。

高田氏は、そこで「八大童子」「童子神」「神体示現の象徴」として、「犬士の首」として等の、馬琴の構想の魅力について大いに述べられた。だが、一般読者にとっての小説的魅力について、親兵衛に関しては、あまり述べられなかった。続く『完本　八犬伝の世界』でも、『封神演義』の「哪吒太子」を出拠に出され、また「信貴山縁起」の「護法童子」を潜在的なものとして示されて、大いに説かれ、我々を驚かせた。だが、やはり馬琴の構想の偉大さと魅力についてであった。

さて、１９８０年の該書は国民的にブームを起こしたが、高田

氏に影響されて湧き起るはずの八犬伝研究そのものは、ただちに活性化したわけではなく、９０年前後以降になって石川秀巳氏・小谷野敦氏が全体構想論等を精力的に発表され、播本真一氏も参入されるようになる。そして、百川敬仁氏を初めとする方々が、各論等を発表されるようになった。そのような中、１９８４年、川村二郎氏『里見八犬伝』は、きわめて早い例であり、しかもまとまった例であった（注２）。

どのような場合にも親兵衛は傷つくことなしに、いわば不可侵の無垢を保ち続け、最後にはやすやすと、何の苦もないといったそぶりで敵を倒すのである。

これは犬士として初登場したばかりの頃についてである。「独壇場」（川村氏）で第一素藤妙椿譚を繰り広げた後、妙椿の幻術による反間の策で追放された親兵衛についても「逆境の悲哀めいた情緒がほとんどまつわってこない」とか、

およそ人間的な挫折感とか心の惑いとか悩みとかと無縁だ

とか、「天才は挫折を知らない」などと評される。第三部、「京師の話説」の後半、虎退治に関しても

親兵衛物語を覆っているのは、一言でいえば、聖者伝説の退屈さである。

とされる始末であった。高田氏新書以前にあった一般的イメージと、同じであったろうか。これらの言説の強さは、その後の親兵衛のイメージ・像の形成に、さらに大きな力を発揮してきたと思われる。

これらに対し、果たしてそうか、違う見方もありうるのではないか、特に親兵衛像に関し、馬琴の構想はまったく異なるものがあったのではないか、その前提のもと、筆者はこれまで親兵衛の行為を一つ一つ検することで読者に言表化された像を明らかにし、馬琴の構想を論じ、その意味と理由を考察してきた。その際、まず犬士としての初出時に違和感をもたざるをえないことを述べた。そこでは、伏姫神女によって「仁論」がなされていることを指摘し、その意味を論じた。それは、親兵衛がのちに大きく成長するにあたっての前提と目標、仁の本質と働きだと考察した（注３）。

続いて、親兵衛の像には明らかに強い変遷が存在することを論じ、親兵衛の「最初の挫折」と都落ちと無常観、孝嗣・正木・義侠らとの「出会いと成長」などについて考察した（注４）。この両論文をもとに、〈親兵衛第二物語〉後半の核心的場面における、『水滸』楊志像を用いた馬琴の構想と意図を探った（注５）。さらに、その最大の山場における「親兵衛の真の挫折と真の成長」を確認し、意味を考察した（注６）。

そして前稿では、真の神童が完成するためには、地上の人間世界を知らぬ純粋培養の子どもであってはならぬとし、一度びは地上の俗世界に生き、自らもその俗によって転び、尚かつ立ち直った者こそ他者を救える「仁の犬士」になるとした。真の救済者は、

一度び挫折せねばならぬ。苦しまねばならぬ。地上世界で苦しんで生きて死んだ伏姫こそ、神仏となれた如く、姫の養い子で八犬の頭領となる運命にあった親兵衛もまた、地上で少年のまま苦しみ、少年のうちに完成し、八犬伝最終部、生きたまま神仙となってゆくのである。ゆえに、少年のまま苦しむため、子供らしい未熟な〈相対化〉されていない自我が相応しく、ために、曇らされていた「美しき性」が挫折を経、その際の苦悩が真実で深かった分だけ曇り無き「美しき性」が現れてくる、これこそ〈親兵衛、真の挫折・改心・成長〉なる核心的場面を用意した馬琴の構想である、と考察したのであった。

また、毛野が「生知」「上知」という儒学的理念の一つの理想像へと完成してゆくのと同様、親兵衛もまた、いずれ「性美しき」聖人に等しい存在へと完成してゆく。「仁・知」兼備してゆく二人の天才少年犬士こそ、〈馬琴の少年英雄物語〉にとって必須だったと考察した（注7）のであった。

本稿では、「京師の話説」序盤にして〈親兵衛第二物語〉後半なる「京師行」において、〈真の挫折・改心・成長〉を果たした親兵衛のその改心・成長が本物であったのか否か、その後の、つまり「京師の話説」の序盤と中盤、本稿では「京師行」と「親兵衛の京師物語」と呼ぶことにするが、そこにおける彼の一挙一動を仔細に検証せねばなるまい。そこで、大小の問題点を剔抉し、指摘や考察をおこなっておきたい。最後に、まとめとしての注目点を掲げ、考察を付すことにしよう。

これらの際、つまらない、超人の独り舞台、の如く言われてきた「京師の話説」が、果たして本当にそうか、実はまったく違うのではないか、面白いところや感心するところがいくつもある、「一人舞台」などとんでもない、筆者はそう考えているのだが、この点についても折々触れてみることにしたい。

Ⅰ、後悔する君子親兵衛、通過儀礼を経て真の中央京師へ

さて本稿では、〈親兵衛第三物語〉前半を「親兵衛の京師物語」と考え、（親兵衛第二物語後半の海賊との闘いの後）浪速の港に着到する第百三十五回後半から、両管領との交誼・室町殿と東山殿への伺候・勅許下賜・朝廷への参内という上京目的の遂行、親兵衛の管領細川政元邸抑留、餅売り太平記読みに扮した紀二六の大活躍、二僧徳用と堅削の悪行、〈親兵衛の第一の活躍〉「京の五虎」ら七人との武芸試合、長い〈竹林巽夫婦物語〉の開始から終焉まで、〈名画虎精物語〉の虎精抜け出て京の人々を騒がすこと第百四十三回までとしたい（尚、「京師の話説」は、第百三十一回末から始まると考えている）。

後半は「親兵衛の虎退治、京師脱出行」と考え、第百四十四回の管領政元独り虎害の責めを追及され続け苦衷し、ついに親兵衛へ虎退治命令、秋篠を除く「京の五虎」とその弟子たちに二悪僧と大勢の逃亡下卒らの卑怯な振る舞い亡ぼし合い、第百四十五回

前半の同じく卑怯な振る舞い亡ぼし合い、後半の二僧徳用堅削の雪吹姫誘拐と虎に襲われる話、紀二六らの二僧発見雪吹姫救助から、〈親兵衛の第二の活躍〉虎精退治、親兵衛関所破り、下卒ら放火関所破り、親兵衛下卒らを称讃称揚、勅使秋篠による親兵衛の叙任話と辞退、以上第百四十九回の終盤の前まで、あるいは一休和尚による東山殿足利義政批判の第百五十回前半まで、あるいはさらに細川に抑留される親兵衛を心配する里見両侯と七犬士の第百五十回最終までと考えているが（尚、「京師の話説」は、第百五十回最終までと思われる）。

前稿まで見てきた如く、子供らしい未熟な、自我の強い自尊の親兵衛に、高慢・独善の像を与え、それが打ち砕かれるというもっとも劇的で、かつ〈転回〉を迫るに効果的な場を、馬琴は用意した。未熟ゆえに曇らされ、隠されていた「美しき性」が、挫折（第百三十三回）を経て、〈転回〉〈改心〉を行った（第百三十四回）のだ。「美しき性」が現れてくるのだ。これが、〈親兵衛、真の挫折・改心・成長〉を用意した馬琴の構想であった。高慢・独善の醜悪な像も含めて、すべては馬琴の作為であったとしたが、ここで以上のことを、より大きくとらえる必要があろう。なぜなら、当時の、そして現代のほとんどの読者をたばかってきたこと、それは、大活劇の初登場以来、見事なるデビュー、独壇場の大活躍の連続、異常な強さと稚気丸出しの子どもらしさ、大人びた言語態度の異常さなどが読者を圧倒してきたことによるのだが、それによって一見心身ともにきわめて秀でた素晴らしい天才少年のように、本人にはまったく問題がない美しい気質の子どもであるかのように、すべての読者を誘ってきたゆえである。こういった直接的な印象、視点、観点からいったん離陸して、親兵衛の存在を俯瞰してみたいのである。

これを、第一の問題点としたい。今、予め結論を先にすれば、いよいよ八犬伝第三部（第百三十一回末「京師の話説」から始まる）に入り、京師へ、真の中央へと向かう童年、いな、少年英雄が、第百三十五回後半〈親兵衛第三物語〉始動までに、どうしても済ませておかねばならぬ〈通過儀礼〉であった、と考えている。馬琴の思想を考える上でも、たいそう面白い構想であると思われる。

それがこの第百三十四回における〈親兵衛大改心〉であったのだが、もちろん、馬琴はのちに（第百六十六回）、親兵衛の初めての挫折について、訳すと〈水練水馬の術を、私が最初から汝に教えておかなかったのは、「故意」と「欠」点を作り、それによって困難を与えて苦しめ、「懲らしてみずから其の箴めに、なさしめん」ためであった〉、と伏姫神女をして親兵衛に夢中に告げさせるのであった。

さて、上述〈通過儀礼〉だが、中央へ馳せ上る、いまだ地方的英雄が、天皇のおわす京師に入る前に、真の英雄らしく、美しい理想の英雄らしく、その心から穢れを祓っておかねばならなかった、とも考えられるであろう。もしそうとすれば、皇室への深い

思いを致す馬琴に、洵に相応しい構想であったろうか。馬琴の思想からみて、結果として、必須の構想であったろうか。

「既に天狗の馮きたるならん」、「井蛙の浅見」、「自恣放言」、「人もなげなる挙止」、「心裏恥ずかしき、我が愆ちを争何はせん」、「いかでいかで、と掌を、合して天をうち仰ぐ」。これらの自省と、恥ずかしくて居てもたっても居られない衝動、烈しい後悔、静かなる思索、深い認識、転回大改心をどうしても必要としたのであった。

苦しむ親兵衛を、代四郎が慰める。その際、かつて採りあげた（注8）ことのある孟子の言、「君子をば欺くべし、陥るべからず」をもって、今回の騒動における苦戦を慰めるのだが、それは些末なことであった。真に代四郎が、馬琴が言いたかったことは、その次に述べられていた。

みづから非として、愆ちを、飾ることなき老実心は、浮薄人の鍼砭也。恁ういはゞ孔子に語道に似て、烏滸がましく思はるべけれど、語にいはずや。君子の過ちは、日月の蝕の如し、過つときは人これを仰ぐ、改むるときも人これを仰ぐ、といひしはおん身の懺悔と同じ。いと有りがたき謙遜なれども、其頭は今の急務にあらず。

身分低い老人による、神々しい幼年犬士への「教諭・指導」だともいえよう。

ここを、第二の問題点としよう。まず、気づくのは、その構図の面白さである。「老人と孫」である。身分高い天才の孫を守護し続ける元気いっぱいの祖父。愛すべき、そして大人の読者の多くが羨む構図ではないか。馬琴の大切な構想であったと考えている。

また、何より「君子の過ちは、…人これを仰ぐ…おん身の懺悔と同じ」に注目される。明白に親兵衛を君子としたのである。聖人・聖賢へと至る道筋の位階である。さて、この『論語』出拠は、「子張第十九」と思われる（注9）。

子貢曰く、君子の過ちや、日月の食の如し。過つや、人皆之を見る。更むるや、人皆之を仰ぐ。

私に解釈してみよう。

子貢が言う。君子も過つことがあるが、その過ちは、日蝕や月蝕のようなもので、誰もが注目する（過っても君子は隠さないので、誰もが注目して驚くが、それは、日蝕や月蝕を見て驚くようなものである）。だが、（君子は過ちをすぐに改めるゆえに）その改めるのを見るや、誰もがさすがは君子だなあと、仰ぎ感服するものだ（それは、まるで蝕が終わった後の日月が、全き円と輝きを一層明らかにするのを、人々が仰ぎ見て、感ずるものあるが如くである）。

自省して、自らの過ちを飾ることなく、認識し、後悔・苦悩を経て、大改心する親兵衛像に与えるに必須の儒学的理念であった。馬琴

がそう考えた、ということである。

また、省みて過ちを改めることの重要さを言うこの部分は、親兵衛を批評・称賛する七犬らによって繰り返される。第百三十五回の前半にあるが、後述する。しかし、馬琴は親兵衛を徹底的に追い詰めはしない。本人が自省後悔した以上、もういいのである。何故なら、彼がまだ童年の少年英雄だから、〈成長〉してゆくのだから。馬琴の理想を託すべき孫にも等しいのだから。

かくして、場面はすんなりと当地の隣尾判官伊近との対面に移る。同じく第百三十四回も終盤部、そこでの親兵衛の態度は如何であったか。判官の称揚、懇切な誘いに対し語るを、私に現代語訳する。

今日の一挙は、同船していた蜑崎照文、姥雪與保（代四郎）が頑張ったのであって、彼らにはいささかの功があるが、自分は小盗人を、わずかに退治しただけで、逆に代四郎に救われて、死ぬところを命助けてもらったのです。

この終盤部の前、同じく第百三十四回の後半に示された真の〈改心〉以後、初めての謙遜であり、正直な気持ちである。早速に親兵衛は、謙った態度を示したのである。無論彼、親兵衛は、謙遜したわけではない、ただ事実を言ったまでではないか、との言もあろう。だが、事実を言うとは、事実を認識したともいえ、相対化の端緒でもあり、成長への一歩でもあろう。いずれにせよ、これが心底からの謙遜か否かは、この後続出する同様の場面の分析によって明らかとなろう。

Ⅱ、伏姫神女の地方神性と、親兵衛の謙譲

さて、判官の授賞せんとするを辞退し、代四郎の勝手な出奔の罪を贖わんと、代四郎の水陸二つの大武功を八犬士に報知せんため、照文の若党紀二六を関東への使いに出してこの第百三十四回は終わるが、問題としておきたいことの三番目は、伏姫神女の登場頻度・重みである。

伏姫神女をどうとらえるかだが、予め言っておけば、安房国、関東といった地域性・里見家守護神なる個別性特殊性という、限定性に縛られた地方神ではないか、と考えている。第百三十三回の、毒を飲まずにすんだ場面、さらに「幸いにして死なざるのみ、正に一期の大厄難」という最大の危地を代四郎に救われた場面では、親兵衛が「我が姫神の冥助」、「伏姫上の、神祐擁護」と述べる。述べるが、姫神が姿を現すことはない。第百三十四回、海底に沈めてしまった一箱の朝廷などへの贈答用黄金と主君里見からの拝領刀をまたしても救ってくれた代四郎に「歓びを舒る」、「嘆唱」する場面、同じく彼は「我が姫神の示現」と述べ、代四郎も「伏姫神の神恩徳誼」、「姫神の冥助」と口にするのであった。まるで毎度毎度の決まりきったおざなりな挨拶であるかの如くに。その上、姫神の言動等が詳述されることはない。第一、姿を現すこと

はない。八犬伝第二部における詳細な言動描写や、威厳と重みある存在感と現実性の描写は、八犬伝第三部前半「京師の話説」の序盤「京師行」と中盤「京師物語」に入ると消えた。

安房の地方神が関東から出る、己が神域から出る、ということは、そういうことなのである。だが、たとえそうとしても、親兵衛らはもちろん、毎回必ず挨拶をするのである。虎退治イコール〈京師脱出行〉に始まる〈親兵衛第三物語、後半〉をいずれ論ずるところで触れるが、簡単に言うと、少なくとも京師脱出・関東帰還が確実になるにつれ、近づくにつれ、姫神のことがいくらか詳述されるようにもなるのである。

ところでこの場面第百三十四回冒頭、つまり初めて大〈改心〉を語り尽くすことになるもっとも重要な場面第百三十四回後半のいくらか前、彼親兵衛は、決して人並みの「感謝」なる言葉を口にはしない。馬琴は慎重である。地の文に「不測の恩義を感じて已まず」、台詞に「今の掙き妙なるかな」「二度まで、咱們が幇助に做られし」「感涙坐に吒むまでに、連りに嘆唱しぬる」といった言表にとどめる。家臣が主のために命投げ出して救うは当然という武家社会の倫理ゆえ、身分低い家来筋の代四郎には、あえて使わぬよう配慮したのか。あるいは、このあとの大〈改心〉を語り尽くす場の前の段階ゆえか。

また、第四の問題点とするが、かつて触れたことのある次の場面も、このことに関連して考慮したい。上記の冒頭に続く場面である。親兵衛の制止を無視して毒酒を貪って倒れた運送夫役・水夫らを仁の霊玉で撫でるや、毒薬を吐き尽くして回復した者たちが感謝し、許しを請うた。それに対し、訳すと、〈いや、自分も同じだ。あの時巧みに謀って騙した海賊どもに乗せられて、用心届かず、等閑であったのは、お前たちの愆ちと五十歩百歩だ。代四郎の助けがなかったら、我もまた、大海原の底の水屑になったのだ。これも里見の主君父子の御仁政のおかげだ〉、と。

正直、この言動には驚かされるのである。武士ならざる下層の人夫たち相手に、〈謙虚に他者を責めず、自分の非を認めた〉のである。以前なら、このようなことはありえなかったろう。上の立場からのみ要求し続け、責め続け、自らを顧みることのなかった、人を人とも思わぬような振る舞いとしか言いようのなかった彼の〈転回〉大〈改心〉、この第百三十四回の後半に設定された山場で展開される大〈改心〉の、その先駆けとなる初の真実の姿であったと思われる。

Ⅲ、『論語』の「過ち論」と、馬琴の「足利義政批判」

そして、代四郎によって陸上の闘いが詳細に説かれる。聞いた親兵衛はため息をつき、代四郎の幇助、姫神の冥助を挙げた後、真率に語る。私に謂うところの〈転回・大改心〉である。かつて拙稿で長々と引いた第百三十四回後半の山場、その冒頭のとば口

のみ、再び引用紹介してみよう。

其の大功を論へば、……阿叟をもて第一とすべし。その次は……蜑崎生に優す者なし。只愆ち有りて功なき、咱們が不覚、面伏也。今こそ諦かせ、我が慢心、

〈今こそ明らかにしよう、我が慢心を〉と、ここから「転回、大改心」が始まるのである。そして、先に引いた、判官との問答の中での謙辞に移り、関東の里見への報告に紀二六が選ばれるのであった。その第百三十五回は、前半が久しぶりに安房里見に場面が戻り、後半京師に着く。前半の中心は七犬による親兵衛の称賛である。小文吾の後、現八が言う。訳す。

親兵衛の今回の手紙に、「日頃は武芸勇力を自負して、「宇宙」（天下）に敵なしとのみ、己惚れ誇っていた愆ちを今こそ知った。先に船路に赴く折に、小文吾・荘介から受けた教諭、格言、身に染み、肝に銘じた」、と言ってきた。またこれも人の及ばぬところで、自らその非をよく悔いて、改めることは、なかなか難しいことであるのに。

と「誉む」る。ここを問題点の五番目にしたい。さて、そこで大角も、

古の聖人たりとも、愆ちなきことを得ざる也。この故に孔子も亦、「丘や幸なり、過ちあれば、人これを告ぐ」といへり。又那の亜聖たる顔回は、過ちをふたたびせず、こも愆ちのあれば也。或いは又「過ちて改めざる、こを過ちといふとしもいへり。世の人多くその非を飾りて、改るはいと稀なれば、犬江が賢才、千万人に、捷れたるを知るに足れり。然はあらずや

と「只顧に、称讃す」れば、荘介・毛野・道節も肯く。七犬と言いつつ、何故かここに信乃のみ名前が挙げられていないが。さて、注目すべきは「賢才」としたことと、あいかわらず七犬が、精一杯親兵衛を褒め称えることである。八犬士は馬琴によって「賢者」とされてきたし、次第に「大賢」になってゆく。巻が進むに連れ、明白となってゆく。それは、【第一部前半里見の建国譚】において「仁」と並んで「知」が問われていたことに対応・比例しているといえよう。即ち、八犬伝は初発から「仁・知」を大きく正面に掲げていた、読者に問うていたと考えている。

七犬が称讃し続けるのは、それは八犬士の頭領であるからというより、馬琴が親兵衛の別格性を確立させるためか。さて、上引の出拠は、もちろん論語であるが、三ヶ所ある。まず、「丘や幸なり、過ちあれば、人これを告ぐ」であるが、「述而第七」に拠る。私に現代語に訳す。

陳国の司敗なるものが問うた、「あなたの主君の昭公は礼を知っているか」と。孔子が言う、「礼を知っている」と。孔子退く。司敗は孔子門人の巫馬期に会釈して言った。「君子は仲間贔屓をしないものと聞いているが、孔子のような君子でも、仲間贔屓されるのか。魯の昭公は呉国から夫人を娶られたが、同姓なるがためにこれを憚って、夫人を呉孟子と謂った。（周の制度

では同姓は婚を結ばない、もし婚すれば非礼となる〉ゆえに、この主君昭公にして礼を知っているというのならば、世間に礼を知らぬ者はいないということになる」、そう言って孔子を非難した。巫馬期がそれを孔子に告げた。すると孔子が言うに、「丘は幸せ者だ、私に過ちがあると、他の人たちが必ずそれを知ってすぐに教えてくれる、洵にありがたいことだ」と。

次いで、「顔回は、過ちをふたたびせず」であるが、「雍也第六」に拠る。訳す。

哀公が問うた、「弟子のうち孰れが学を好むを為すか」と。孔子、対えて言う。「顔回なる者がいる。学を好む。怒っても怒りを遷さぬ、つまり八つ当たりなどしないし、同じ過ちを二度と繰り返すことはない。不幸短命にして死んだ。今はもうこの世にいない。この者以外で、学問を好む者がいるとはまだ聞いていない」と。

最後、「過ちて改めざる、こを過ちという」は、「衛霊公第十五」に拠っている。訳す。

孔子が言う、「人は誰でも過ちを為すものだが、問題は、過ちを犯してもその過ちを改めようとしないことで、それを真の過ちと謂うのである」、と。

三例とも、割合人口に膾炙した句であったろうか。親兵衛像を作るに当たって重要なことは、〈異常に若い、傲り昂ぶり失敗する、挫折する、改心する、成長する〉という過程を、劇的に、真実性をもって構築することであろう。その際、周りの者が称讃するのだが、その賛辞は分かりやすいものが望まれようし、限度を超えた誉めようではいけなかった、ということであろう。その点、実際に用いた三例は、短い句文で、分かりやすく、妥当なものであったといえよう。

さて馬琴は、親兵衛を追い詰めはしない。今度は救いに掛かったのである。先に述べたように、親兵衛は馬琴が理想を託すべき孫に等しいのだから。自省・後悔・改心・成長して「美しき性」となった天才少年犬士が、八犬士を代表して中央に乗り込むのである。読者に再度理想の英雄たるを確認させるべく、称揚・称賛の嵐となる。

そして第百三十五回半ば、いよいよ〈親兵衛第三物語〉が始まる。しかるに、その始まりは以下の如くであった。

休題再説。犬江親兵衛、蜑崎照文們が渡海の船は、……この秋八月の中旬に、浪速に居ることを得て、猶権且船に在り、先ず代四郎を遣わして、京師の光景を探らするに、……前将軍義政公は、辞職の後も風流の驕奢に、銭を抛ち財を竭して、民の怨訴を見かえり給わず、況いて治世四十余年の程、国乱れ民苦るを、屑とも思ひ給わず、……

云々と、義政の失政・不徳と細川・山名の内乱による応仁の乱の説明、三管領以下の世嗣争いから下剋上の戦国時代へ、少年新将

軍九代義尚公の称揚へと続く。ここを、問題点の第六としたい。

〈親兵衛第三物語〉とは、つまり〈将軍足利義政批判〉で始まり、結論を先に言うと、〈足利義政批判〉で終わるのだ、ともいえよう。馬琴の厳しい政道批判、為政者批判が長々と述べられるのである。これについては、別稿（注10）に委ねたい。

美しい理想の少年英雄が乗り込み、理想性・英雄性を発揮し、輝きを放つに相応しい歴史的背景、史実としての汚れた応仁の乱と、その因たる中央権力の不徳・不実を馬琴は詳述するのであった。ゆえに乱世の中、京と朝廷の衰落、困窮を述べて、「勤王主義」の者が銭財を多く奉れば、必ず特別の「勧賞あらん。所願ある者、願い稟さば、勅許疑いなかるべし」、即ち京師行の本来の目的（八犬士の姓を「金碗」と改める勅許を得ん）のために、状況や好し、とされるのであった。

そして、親兵衛らは第一の権臣、管領細川政元邸に伺候し、その家宰香西復六に交誼を通じ、次いで管領畠山政長邸に伺候することとなる。細川政元、花の御所にて新室町殿義尚公に親兵衛らの願いの件を上聞せしめ、東山殿（父義政）へ伺えとの言をうける。義政の「兵乱の後財用足らず、公武倶に不如意なるに、料らずも幇助を得たる、報いなくはあるべからず」、云々との仰せあって、朝廷に奏聞され、詮議あって認められ、主上に奏聞、義尚に勅詔あり、宣旨が下される。かくして、親兵衛らは花の御所に参上、室町殿や両管領らに見参の儀式を無事に終え、次いで東山殿へ詣でて同様に式を終え、翌朝ついに参内して、階下に朝恩を拝したのである。

これで上京の目的を果たしたのだが、〈京師の話説〉の中核と、〈親兵衛第三物語〉の中心はここから始まる。両管領に帰国の暇を賜らんと赴けば、政元その儀を許さず、親兵衛のみを抑留して、長いこと還れぬことになるのであった。八犬伝第九輯下帙下套の甲号、巻第二十四～二十八、第百三十六回～百四十五回、及び下帙下套の乙号の上巻の粗前半分、第百四十六回～百四十九回（百五十回冒頭に、私に謂う〈一休の知論〉と〈一休の政道批判・義政批判〉が備わり、ここまでが〈京師の話説〉の範囲か。これらについては後考に俟ちたい）が、その「京師の話説」の粗全容である。

Ⅳ、管領細川政元邸抑留と、「知仁勇、三徳」の親兵衛の謙譲

さて、本稿のメインテーマである〈親兵衛第三物語における親兵衛の成長〉は如何であったのか。つまり、〈親兵衛第二物語〉の掉尾、「京師の話説」の冒頭を飾る、黄金運送の海行での海賊との水戦において、生まれて初めての危難、まさしく「死」に直面した後のない危地、霊玉のおかげで「幸いにして死なざるのみ、正に一期の大厄難」を体験した。その上主君より預かった皇室等への贈答用黄金、更には拝領刀まで失い、

一期の不覚、なまじいに、活ける甲斐なき罪重かり、いかに

すべき、と臍を噬む、悔いの八千遍、百千たび、左さま右さま思えども、思い難ねたる手稠の難儀に、嘆息の外なかりしという初めての〈絶望〉を体験した親兵衛。まさしく〈真の挫折〉であった。

この状況を救った代四郎に、思わず「做られし」と敬語を使い、「感涙坐ろに吒むまでに、連りに嘆賞」する親兵衛。〈他の七犬は自分に及ばない、自分が一番だと自負していたのは天狗が憑いていたとしか考えられぬ〉、との強い自省・後悔。そして深い思索が訪れる。ようやく他の七犬の身の上に思い至り、自分の偉大さしか見ようとしなかったのが、ついに、他者の人生を想像し、共感できるようになった成長した親兵衛、またこの内省と自己批判にようやく辿り着き、《相対化》を果たした親兵衛、と拙稿で考察したが、その親兵衛が真の中央、京師に至って、その自省と成長が本物であったのか否かを検証すべきであると思われる。また、これらすべては馬琴の作為としたが、それは「京師の話説」においても一貫しているのか、これらを検証せねばなるまい。まずは、「京師の話説」と〈親兵衛第三物語〉に沿い、逐条的に物語を追って確認、証明してみよう。それら逐条的な解釈と、注目点問題点の考察を経て、最後に総合的にまとめてみよう。

さて、漸く船出を再開して一旬余、一行は摂津尼之崎に着到、浪速の浦に大船を浮かべ、拠点としたのであった。ただちに代四郎を京に遣わして探らせ、その報告を聞く、という形で〈親兵衛第三物語〉は始まったのだが、前述したように、冒頭から前将軍義政の悪政失政・不徳不義という馬琴の前将軍義政批判が大いに続くのであった。そして権臣管領訪問、室町殿・東山殿への伺候、ついに参内へと続くのだが、ここらは形式を踏ませているところで、親兵衛の〈自我〉が出てくる場面はなかったといえよう。筆は進んで、先述したように、管領細川政元によって親兵衛のみ帰国許されず、政元邸に抑留されることとなる。そして、ここから検証の対象となる親兵衛の言動が始まるのである。

第百三十六回、帰国を急ぐ親兵衛らは、細川家宰香西より、室町殿の内意示さんと政元邸への又の伺候を余儀なくされ、その政元の口を通して当代将軍義尚公の文武兼備、学問好きなること、その将軍による親兵衛への称讃と彼を京に留め置かせ、時折親兵衛の武芸を見たいとの意思（実は政元による仮構であった）を示されるのであった。これに対し親兵衛は、謹んで申し上げる。訳す。

恐れながら伝聞の誤りにござりましょう。武芸は武士の家業ですから、それがしもまた人並みに弓の使い方、太刀の術を学ばないわけではありませんが、どうして、身分高き上つ方の皆様の御賢覧に奉るに値する、それほどの技がありましょうか。先に素藤征伐で小さな功ありと仰せになるのは、京の人々の誤って伝えたもので、所詮（主君里見の武徳のおこぼれにあずかったもので）虎の威を借る狐に似た僥倖に過ぎないものです。それを人々が（噂に流され、そこのところを）あまりよく考えな

いで言うものですから（大げさな話になったにすぎないのですよ）。

謙譲な態度であるが、誉められた時に誰しもが示す、普通の謙遜の態度といってよいだろう。これを、これまで示してきた以前の驕り昂ぶった自尊の言動に比すると、雲泥の差といってよいだろう。

同じく第百三十六回。抑留のことを宿に帰って代四郎に告げれば、「とは思えども和子の武勇の、はやく華洛に聞こえしは、徳弧ならず隣ある、所以にもや候はん」と『論語』の語句を用いて喜ぶのに対し、親兵衛は以下の如く、政元の告知に対して三つの疑いを示すのであった。その一つ目に謙辞がある。

我が身再び世に出て、里見殿に仕え奉るは、この春よりの事にして、素藤征伐を除くの外、屢軍陣に敵を屠りて、名を顕しし事はなきに、何人が伝え稟して、将軍家は知ろし食しけん、是疑うべきの一ツ也。

事実を率直に述べており、いささかも己惚れる様子はない。謙遜というより、疑問を口にする素直な態度である。

さて、この場面には、特筆すべきことがあった。照文が京に残る親兵衛を慰める際の、牽制的な注文、というより、心配であるその言にあった。問題点の第七としたい。

和殿は万事に神々しくて、知仁勇の三徳あれば、縦い利をもて誘引るゝとも、義に背く惑いなかるべく……

「知仁勇の三徳」である。これについては、第一部【里見の建国譚】における里見初代義実の像を論ずるところで考察した（注11）。『中庸』に、

知仁勇の三者は天下の達徳なり。之を行う所以の者は、一なり。

と示される如く、儒学における最高の称揚であった。即ち、親兵衛は「聖賢乃至聖賢並みの里見」と同格であると、馬琴は訴えていると考えられようか。

そして「神々し」である。これは、割合目立って使われてきた印象であろう。そも、この「神々し」とは、なんという言辞であろう。八犬伝世界内における伏姫神女の現実性ゆえに、女神の秘蔵っ子にとって当たり前の称辞であるが、はたして当時の読者にとって如何であったか。この照文の揚言の後、親兵衛の真実、相対化を認識した後の本心が語られる。ここを第八の問題点とする。

①意うに我が義兄弟七名は、各々窮阨ありし折、九死を出て一生を、得ぬる日までの艱難憂苦を、伝え聞くだに毛骨竦つに、咱等は、曩に妙椿が、妖術によりおん疑いを、稟けて他郷へ遣わされたる、其も須臾の程にして、館のおん疑いはやく解け、反って功名両つながら、義兄弟等に抜萃たる、心の傲りあらじとて、今帰路に柵掛けて、又窮厄に遇し給うか。こも姫神の神謨りにて、曩に苛子崎の水難に、等しかるべき我が為ならん、と悟れば後ろ易かりき

傍線部①こそ、本稿「序」に示した、強い自省と後悔の末に訪れた深い思索において、初めて義兄弟七犬の身の上を、他者の人生を想像し、共感できるようになった親兵衛の、〈真の成長〉の継続、成長が本物であったことを意味しよう。

またここで、これまでも今後も何度も言及されることとなる「姫神の冥助」や、これに類する「姫神の神謨り」といった言辞にも注目しておきたい。第三部、京師行が始まって、あまり表示されなくなった「姫神」が「京師の話説」の進行に従って、何より京師からの脱出が近づくに連れ、次第に「伏姫神女」「姫神」が多出するようになると思われる。それは簡単に言うと、地方性を有した姫神の中央神・皇室神への遠慮、中央を脱し己の神域に近づくに連れての神力回復等を示すと考えている。

V、僅かに描かれる〈親兵衛第一の活躍〉

このの ち代四郎、紀二六との打ち合わせが続き、第百三十七回に入って、餅売り兼太平記読みに扮した紀二六の活躍と、〈結城法要〉の場で八犬に徹底して懲らしめられた悪僧徳用、実は管領細川政元の家宰香西復六の実子にして政元の乳母子で、現在細川邸の奥深くに隠れているのであるが、その徳用の悪少年時代の挿話が展開される。

第百三十八回に入っても、徳用とその弟子堅削による親兵衛への讒言の話が展開され、また餅売り紀二六の語る太平記の、備中「児嶋高徳」の弧忠の話や、紀二六の活動などが紹介される。

第百三十九回、代四郎はついに紀二六と町中で出会い、互いに事情を解き示しあう。親兵衛は、武芸御覧の前に政元自ら試検すべしと、政元邸にて白打槍棒・撃剣・鎗・弓・火銃・棒の六芸の名人と闘うことが決まり、「京の五人」と徳用を含めた六人と対面する。その場でも、親兵衛の態度は変わらない。

左ても右ても勇士達に、及ぶべくは候はねども、然ればとて武士たる者が、敵手を怕れて今更に、云云と辞い稟さば……

そして、最初の撃剣に快勝、続く白打槍棒に不戦勝。

第百四十回。続いて騎馬槍棒と緊急附けたりで登場した飛礫の二名に快勝。騎射騎銃にても親兵衛は秋篠ら二人に美しく勝つ。以前と違って、闘い毎に、闘いの最中、大言したり壮語したりすることはない。

ここを第九の問題点にしたい。考察としては、馬琴は筆を抑制している、としか考えられない。ここで大言壮語させたら、かつての高慢な像に戻ってしまう。「転回・大改心」を経て「美しい性」に転位した「仁の人」は、須く抑制的であらねばなるまい。

さて、六芸六人に快勝した親兵衛に、悪僧徳用が騎馬槍棒にて挑むを軽くひねり、計七人に勝つ。それを絶賛する政元に、親兵衛は、

勝負は各時運あり、小臣聊か做す事ありしも、亦是一時の幸

いのみ。何等の功候はむ。

と、普通に謙遜の態度で、落ち着いて応ずるのであった。その親兵衛の活躍が京の内外に流れ、英名が伝わり、疫病除けの札に「犬江親兵衛宿」と書かれるなどのエピソードの後、政元との対話が続く。その中で、里見父子や結城侯の忠信賢良を訴えれば、政元は徳用に聞くところと全く違うと駭嘆し、ただちに間諜を結城へ派遣し、真相を秘かに探らせるのであった。

政元、親兵衛のためならば男色に踏み切ってもよい、艶簡をやろうか、直に口説こうかと情欲盛んなれど果たさず、漸く色道面では諦めたものの、忠義賢良英傑の親兵衛を惜しんで決して手放そうとはしなかった。

続く第百四十一回から、〈竹林巽夫婦、名画虎精物語〉とでもいうべき話説が始まり、第百四十三回まで続くのだが、ここには親兵衛はほとんど全く出てこない。この点を第十の問題点とする。親兵衛の武芸七試合は、第百三十九回後半から百四十回前半に描かれる。つまり、親兵衛の活躍、主役的活躍・独壇場は、ここだけである。ここまで〈親兵衛第三物語、前半〉、即ち「親兵衛の京師物語」を見てきたが、親兵衛の活躍は、分量的にも趣向的な面白さにおいても僅かなものであった。

しかし大局的には、それでも重要であると言えるだろう。何故なら、この「親兵衛の京師物語」にも、物語性には寄与しないが、何度か管領政元が親兵衛を称える場面が用意され、その度びごとに謙譲する親兵衛が描かれるからである。この場面が時折出てくる限り、親兵衛の主役は変わらない。あまり活躍していなくとも、時折中央権力や仲間によって称賛される、謙譲する。違和感を伴っていようがいまいが、読者の印象には残る。何より、謙譲する親兵衛にこそ、読者は望む理想像、「仁と知」の望ましい理想の少年英雄を見るからである。従って馬琴は筆を抑える。もはや、〈親兵衛第一物語〉の頃のように、遮二無二活躍、「一人舞台」の独壇場ばかり用意する必要はなくなった。「美しい性（さが）」の少年英雄を描くだけでよかったのだと思われる。

竹林夫婦の物語は、「名画の奇瑞」という伝奇譚のみならず、人間の「性・さが」に関するたいへん面白い話だが、本稿ではその話柄や核心には触れない。

本稿で扱う対象は以上である。

今、後続部について簡略に触れておけば、続く第百四十四回に至って竹林夫婦らは消え、虎精退治を巡って醜い人間たちの右往左往して亡んでゆく様が描かれる。と同時に、漸く親兵衛登場となる。ただし、分量的には僅かなものである。虎の大被害の責任を上下から一身に浴びせられ、追い込まれた政元は、虎退治の最後の手段として、ついに親兵衛に命ずるが、親兵衛は〈帰東と引き換えならば〉と条件をつけ、四つの新関所の自筆の手形をもらう。これだけである。その間に、怖じ恐れ、逃亡した大量の兵

卒によって、「京の五虎」や弟子ら（秋篠を除く）は撃ち殺される。親兵衛が活躍せずとも、道義を踏みにじる悪は、醜悪滑稽さを示しつつ自ら亡んでゆくのである。即ち、〈親兵衛第三物語、後半〉たる「親兵衛の虎退治、京師脱出行」の始まるこの第百四十四回から、竹林夫婦に代わって、京師のさまざまな人間たちの醜さをめぐる面白い話が始まるのだが、それは後考に譲る。

以上、「京師の話説」の多くと〈親兵衛第三物語、前半、「親兵衛の京師物語」〉を逐条的に追って、親兵衛の言動、内部世界を検証してきた。特に、十個の問題点を指摘し、考察してきた。その内二個の問題点は、「伏姫女神の地方神性」と「馬琴の足利義政批判」であるが、残る八個の問題点は、いずれも親兵衛に関わるものであった。結果、そのどこにも、もはや親兵衛の傲慢、己惚れは見られなかった。そこで、以上を承けて、次節でまとめてみることにしたい。いくつかの特徴と、四つに絞った注目点を挙げ、馬琴の構想等を考察してみたい。

Ⅵ、まとめ、特徴と注目点

まず、これまで指摘・考察してきた親兵衛に関する八個の問題点を記す。

第一、「転回・大改心」は、京師に向かう前に浄化を済ませておかねばならぬ「通過儀礼」。

第二、自らの過ちを認識し、改める親兵衛は君子。

第四、下層の人夫相手に自らの非を認めた。

第五、過ちを改めた親兵衛を『論語』三例を引いて七犬が称える。

第七、親兵衛は「知仁勇の三徳」と儒学的に最高の称揚で、聖賢並みの里見と同じ。

第八、義兄弟七犬の人生を想像し共感できるようになり、成長が本物であったこと。

第九、「仁と知」の理想の少年になった上は、もはや大言壮語しない。

第十、謙譲する理想の少年英雄は活躍場面も多い必要はなく、筆は抑制的で、そもそも登場場面が僅かである。

以上の八点である。まとめると、高慢と独善の以前の像を一新し、「転回・大改心」した親兵衛の成長とその継続は本物であること、彼は儒学的に「君子」であり、「知仁勇の三徳」を備えた聖賢並みであること、そして、「転回・大改心」は京師に入る前に済ませておかねばならぬ「通過儀礼」であると思われること、こういった大きく三点になろうか。

他に特徴としては、この大きな三点に重なることも含めて順に挙げてゆくと、第一番目に〈自らの非を認識して、過ちを飾ってごまかそうとしない「老実心」即ち〈真実な心〉〉に至ったことが挙げられよう。〈七犬は皆自分には及ばない、自分こそが一番だ〉、に象徴される傲り昂ぶりの像から、やっとまともな像になっ

たのだといえよう。《少年の成長》であると思われる。馬琴の大構想の一つ、八犬伝に彩った〈世界観〉の大切な一つであると考えている。

誰でも過つ。だが、己の過ちを認識し、うけとめ、改めることが大事だという、論語以来の真理について、先に見た通り、地の文で馬琴も、台詞で七犬も繰り返しそれを語る。派手な登場以来、理想的な英雄、天才少年と思われてきたが、大言壮語・高慢自尊から致命的な敗北と失敗へ。そして、後悔・自省・認識・転回・大改心へ。しっかりと軌跡を描いている。つまり、すべてが馬琴の作為であった、親兵衛の成長、〈少年の成長〉を語るための。

次いで、人に称揚、絶賛されても、傲り自惚れることなく謙遜し、冷静に事実を述べる、という、誰しもが誉められたときに普通に示すであろう、また大人として普通に示したい態度をとるようになったこと、そして、この態度が「大改心」以降、〈親兵衛第三物語〉前半の全体にわたって常に見られる姿であることが挙げられよう。即ち、馬琴が常に意識して親兵衛の謙譲の態度を描写していたこと、これも明らかになったといえるだろう。それは、相手がたとえ中央権力を象徴する者、管領細川政元であっても変わらない。かえって相手の過褒をたしなめる如く、あくまで冷静に謙譲するのである。

また、親兵衛が一人京に留められることになるという厄難が明らかになった後の会話において、親兵衛が〈相対化〉を認識した後の本心を語る場面、Ⅲ節では原文引用したものをここで訳してみよう。

〈考えてみると、我が義兄弟の七犬士は、各々皆窮阨の人生であったが、ようやく安心できるようになった最近までの、その艱難辛苦は、伝え聞くさえ身の毛立つほど恐ろしいというのに、自分の場合なぞは、この間妙椿の妖術のために疑いをかけられてしまい、他郷へ出されたにすぎないのです。それも、きわめて僅かの間のことで、主君の御疑いも早解けて、かえって功名二つともに七人を抜いてしまったのですが、そのために心が傲り自惚れないようにと、今こうして帰路に難事を作って、また窮阨に遇わせなさるのか。これも姫神の御配慮で、この間の苛子崎の水難に匹敵することで、私の為にしてくださったことでしょう〉、と。

やはり、あの大〈改心〉時の思索、自省・後悔・認識、相対化は継続している、あの改心は本物であったのだ。次いで、京の五虎ら七人に快勝し、政元侯の絶賛にも、大言壮語することなく、自然な謙辞で落ち着いて応じた。第百四十四回以降の後半に入っても、虎狩りに出発する際の言なども、素直で謙虚な態度であった。そして徳用・堅削の雪吹姫誘拐が起こり、紀二六・代四郎らは親兵衛の虎退治に随伴しようと、入山・山越えせんと計る。〈親兵衛第三物語、後半、「京師脱出行」〉とでもいうべき話説が始まるのであるが、ここでは、前半第百四十三回までにとどめることにする。

次に、注目点を挙げてみよう。一番目は、伏姫神女についてである。関東、安房国、里見家の守護神という限定的な〈地方神〉であろうと述べた。第二部における全能性は、やはり己が神域にあってこそのものだったといえよう。第三部に入るや、地位が相対的に著しく下がったとしかいいようがない。称讃された親兵衛が、謙譲・謙遜の態度をとるたびに、「姫神の助けのおかげです」と、念仏のように答えるのに読者は慣らされたろうが、いずれもただ短く口にするだけで、ずいぶんとおざなりである。あしらいの如く。それが、関所破りのへんから、少しく詳細に記されることも起こってくる。即ち、己が神域に近づくにつれて、神力も上がってくると考えられよう。すると、帰路や帰国後、再び大きな神力を読者に示すことになろう。京師における振る舞いのおとなしさは、地方神の中央神に対する〈遠慮〉であったと考えられよう。

二番目の注目点は、第百三十五回（この前半のみ舞台が一時的に関東に戻る）、海賊との闘いのことや代四郎の活躍を本国、七犬士に知らせんと、紀二六が遣いとなって関東に戻り、安房に親兵衛の手紙を届けた時の、七犬の反応の中の現八の話にあった。ここも訳して再度紹介する。

日頃は武芸勇力を自負して、「宇宙」（天の下）に「敵なしとのみ思い誇りし、愆（あやまち）を今こそ知りぬ」。この間、船旅に出発する際の、「犬田犬川の教諭格言、身に染み肝に銘ず」と言って寄こした。

というものであった。これが、つまりこれまで宇宙に敵なしと自惚れていたとんでもない子供じみて傲慢な人間であったこと、これを認識し自省・後悔したことが親兵衛にとって切実であったことは、ここまで縷々触れてきた。だが、七犬にとっても実は切実であったろう。八犬士の頭領で天才少年だが、世間知らずで己惚れ屋。誰しも扱いに困るではないか。それでも犬士の母にあたる伏姫女神が自ら助け、自らの神域奥所に引き取って直接女たちに育てさせた、他の七犬とは違う特別の犬士であった。しかも、「仁」の玉を持っていた。かつて拙稿（注12）で述べたように、論語において決して一つの意味に断定、限定されることのない、不思議で大きくて深淵を秘めた「仁」、儒教徳目の筆頭とされた「仁」の主であった。

親兵衛が自分たちの筆頭で、特別な存在だとは、七犬誰もが認めていた。大角が、「犬江が賢才、千万人に、捷（すぐ）れたる」と「只顧（ひたすら）に、称讃す」るように。だが、ついに親兵衛も自分たちと同じように、自ら己の限界や無力を知って挫折し、自ら反省し、自ら後悔に苦しんでいるのだ。親兵衛にも人並みに《相対化》が訪れたのだ。人生の先輩として、同じ苦しみに悶える親兵衛に、七犬は、初めて共感したことであろう。ついに八犬士は、一体となったのだ。

三番目の注目点は、「後半」冒頭第百四十四回について、「虎精退治をめぐって醜い人間たちの右往左往して亡んでゆく様が描か

れる」、と記した点、これは後考で論ずるが、これに関係する。「京の五虎」や弟子たちは、秋篠他を除いて、逃亡した多数の卑怯な兵卒たちによって撃ち殺されるのだが、「親兵衛が活躍せずとも、道義を踏みにじる悪は、醜悪滑稽さを示しつつ、自ら亡んでゆくのである」とも述べた。これは、「京師の話説」、〈親兵衛第三物語〉における親兵衛の登場、活躍、言動、内面吐露、いずれもきわめて少ないことに関連していようか。再びこの点に注目する。

馬琴は、もはや親兵衛を遮二無二活躍させはしない。認識、自省・後悔、大改心し、相対化を果たし、真の成長をとげた親兵衛に相応しい物語構成・展開を進めてゆくのである。親兵衛が主役であるは明白なのだが、登場場面はきわめて少なく、活躍は抑えて描かれる。その分だけ、かえって脇役たちの興亡、右往左往が、きわめてていねいに細かに描写され、馬琴らしく、脇役といえども最後まで見届けるのである。

この点に関連して、四番目の注目点が浮上する。関東から勇躍、京師に乗り込むという、読者も、おそらく作者も皆、「親兵衛の物語」と思い、それゆえに犬士親兵衛初登場時、〈親兵衛第一物語〉の頃のように、超人的に、かつ独壇場の如き場面が続くと思い込んでいたであろう。だが、違った。根本的に異なった物語であった。中央の真の権力たち、その家臣・走狗たる「京の五虎」たち、奴僕の如き多数の兵卒たち、元高位の僧たち、一対の愚かで哀れな夫婦。さまざまな人間が蠢き、さまざまに生き、亡びする、派手派手しくはないが巧妙にリアルに描きとられた面白い【人の世の物語】であった。

必然的に親兵衛の登場も活躍もきわめて少なかった。その中で親兵衛と紀二六・代四郎が、そして「後半」になると里見の名も無き下卒らが見事に成長するという、立派な人間物語であった。これまで「つまらない」と言われ続け、親兵衛の一人目立つ超人的物語の如く言われ続けてきた「京師の話説」が、実は「さまざまな人間の蠢く都」で「少年と老人や無名の下卒」らが活躍する【成長の物語】であったことに気づく時、馬琴の真の構想と、懐の深さに、われらは心動かされるのだ、そう思われるのである。

注

（1）中公新書。その後、大幅に加筆増補されたのが『完本　八犬伝の世界』（ちくま学芸文庫、平17）である。

（2）岩波文庫。

（3）拙稿「八犬伝、親兵衛論序説」（『横山邦治先生叙勲ならびに喜寿記念論文集　日本のことばと文化』（溪水社、平21）。

（4）同「八犬伝、〈親兵衛第一物語〉における〈成長〉について」（『就実論叢』39号、平22・2）。

（5）同「八犬伝〈親兵衛第二物語〉へ、水滸・楊志像と親兵衛像」（『近世文芸　研究と評論』78号、平22・6）。

（6）同「八犬伝親兵衛、〈真の挫折・真の成長〉」（『近世文芸

研究と評論』79号、平22・11）。

（7）同「南総里見八犬伝、親兵衛と「性の美」」（『就実表現文化』6号、平23・12）。

（8）同「八犬伝と孝経・論語と史記」（高田衛編『復興する八犬伝』、勉誠出版、平20）。

（9）本稿をなす際に拠った種々の漢籍叢書のうち、本稿では引用書き下しに際しては、明治書院の『新釈漢文大系』を基本的に用いることにしたが、一部私に手直しした。解釈・訳は、『新釈』のみならず、種々のものを参考に、私に釈した。

（10）『就実表現文化』8号（平26・2）に掲載予定の「八犬伝の世界観、「知論」をめぐって――儒学的理念［仁知兼備］と［誠］―」において、「京師の話説」末部の長々とした［一休、足利義政批判］について論じた。

（11）拙稿「八犬伝の根底世界」（『就実論叢』36号、平19・2）。

（12）注（3）に同じ。

※テキスト本文は『新潮日本古典集成』別巻（浜田啓介氏校訂）に拠ったが、適宜振り仮名・送り仮名を加え、現行仮名遣いに改めた。